

戦争責任をとる一つの形

— 西ドイツ・イスラエル両国の教科書勧告を中心に —

藤 沢 法 咲

Eine Form von Verantwortungstragen für den Krieg

Hoei FUJISAWA

はじめに —責任について—

社会科教育は、いうまでもなく、主権者たるにふさわしい国民の形成を課題とするものである。民主主義の「強度」は、どれほど多くの国民が、どれほど深く、自らの政治的社会的責任を意識しているかにかかっている。

もとより、責任の自覚がありさえすれば十分だということではない。責任を的確に果たすためには、社会の科学的認識が不可欠なのだが、まずもって責任の自覚が必要であることに変わりはない。

ナチス時代教壇を追われ、戦後まもなくハイデルベルクに復帰したヤスパーズは、最初の講義の中で「国民が自ら責任を負うことを意識するところに政治的自由の目醒めを告げる最初の徴候がある」⁽¹⁾と述べているが、時宜をえた適切な指摘であったといえよう。

責任 (responsibility) とは本来, response (答える) ability (能力) を意味している。(ドイツ語の Verantwortung も antworten すなわち「答える」に由来する。) つまり, 他者からの問いかけに, きちんと答えられる能力こそが, 責任というものの核心なのである。

ユダヤ・キリスト教世界のばあい, この responsibility (ないし Verantwortung) という言葉は, 他の人間からの問いかけに答えるという意味あいとともに, 絶対者・超越者としての神からの問いかけに, 自分の良心の奥底から答える, という意味あいをも含んでいるはずである。だから, たとえばドイツ連邦共和国基本法 (西ドイツ憲法) は, その前文の冒頭で,

「神および人間にたいする責任を自覚し, (Im Bewußtsein seiner Verantwortung vor Gott und den Menschen) ……ドイツ国民は, ……このドイツ連邦共和国基本法を決定した」

と謳っているのである。

ところで日本のばあい, 政府もそしてまた国民の多数も, たとえば「15年戦争で, なぜ日本人は2000万人ものアジアの隣人を殺戮したのか。この事実を戦後の日本人はどうふり返っているのか」, あるいは「戦前・戦中の日本の最高指導者だった天皇が, なぜ戦後も40数年間 (その死に到るまで) その座を占め続けてきたのか」といったアジア諸国民からの問いかけに答える能力も, いや, この問いかけにまともに向かいあおうとする意志さえも, ほとんど全くもっていないかのようである。

もとより, 戦後日本を代表する知識人たちの少なからぬ部分は, 夙に日本人には伝統的に主体的責任の意識が著しく稀薄であることへの憂慮を表明し, かかる精神的風土に民主主義を根づかせることの困難性を鋭く指摘していたのだが, その声を阻む政治の, そしてまた日本文化の壁は厚かった。

しかし, アジアの隣人たちに甚大な犠牲を強いたあの侵略戦争に加担し, しかもその事実をいまなお直視しようとしないうる己れのあり方を厳しく問うことを抜きにして, 日本人が本格的に平和の主体・自由の主体に生まれ変わることはありえない, との思いが, 私をして戦争責任・戦後責任の問題にこだわらせ続けているのである。

政治や社会にたいする主体的責任の意識の稀薄な日本人が「己を知」り、自らの伝統的体質（「日本文化」といってもよい）をくみかえようと志すばあい、日本としばしば対比される西ドイツとの比較は、一つの有効な方法であろう。

西ドイツのゲオルク・エッカート国際教科書研究所が、戦後、教科書とりわけ歴史教科書から民族的偏見・民族的自愛を払拭し、より公正な歴史認識を実現すべく諸外国の関係者と協議を重ね、それがさまざまな共同勧告となって実を結んできたことは、近年わが国でもある程度知られつつある。

小論では、同研究所を一方の主体として1985年に合意をみた西ドイツ・イスラエル両国の教科書にたいする共同勧告を中心に、西ドイツの事例に即して、教育を通じて戦争責任・戦後責任をとる一つの形について考えてみたい。

I 西ドイツ国際教科書研究所のこと

西ドイツ北部のブラウンシュヴァイク市にある国際教科書研究所（ゲオルク・エッカート研究所）は、西ドイツ教員組合連合に支えられつつ、カント大学²歴史学教授ゲオルク・エッカートを中心に、1951年に設立された。（実質的活動は、1949年に開始されている。）

この研究所の活動の重要性にわが国でいち早く着眼したのは、上原専禄であった。（「歴史研究と歴史教育」、『歴史学研究』1954年1月号所収。）

上原は、いうまでもなく、日教組の力で1957年に創設された国民教育研究所（民研）の運営委員長（のちに初代研究会議議長）として、民研の方向づけに指導的役割を果たした人物である。そして1958年には、エッカート自身、設立後まもない民研を訪れ、国際的な教科書研究の重要性を力説している。

戦後日本を代表する教育学者で、エッカートに最初に会ったのは、おそらく勝田守一である。1950年7－8月、ベルギーのブリュッセルで「教科書とくに歴史教科書改善のための国際セミナー」がユネスコ主催で開かれた折、勝田も

エッカートも参加している。ただ参加した分科会が違っていたため特別の交流はなかったようだが、セミナー参加者が小旅行を試みた折、オランダのロッテルダムのホテルで勝田はエッカートと同室となり、戦火の傷跡未だ消えやらぬ街を眺めながら、エッカートが「このあたりの風景は爆撃されたドイツの都市に似ている。これを見て想像してくれ」と語ったことを、帰国後回想している。³

さて、エッカートの参加した分科会では、ここでの論議を来年もう一度集って発展させようという話がもち上り（おそらくはエッカートのイニシアティブで）、1951年、ブラウンシュヴァイクで「国際歴史教員会議」が開催されることになる。そしてこの会議の決議を受ける形で「国際教科書研究所」が設立される運びとなったのである。

ところで、研究所発足後まもない1952年から53年にかけて、森昭（当時阪大助教授）が西ドイツに留学しており、カント大学学長のローデンシュタイン教授（当時西ドイツ教員組合連合の副委員長でもあった）や、エッカート教授とも親交が深く、国際協力による歴史教科書改善の動向にも注目している事実は、帰国後公けにした『ドイツ教育の示唆するもの』（1954）からうかがうことができる。

森は、ローデンシュタインやエッカートの依頼で、教員組合連合の総会で記念講演も行なっているのだが、その講演で森は、国際協議によって歴史教科書を改善しようとする西ドイツ教員組合の活動を評価しつつ、「省みて日本の教師は、東アジア、東南アジアにおける国際的民族理解に対して、十分の努力をしてきたとはいえません。ここに日本の教師の最も大きな課題の一つがあると思います」⁴と述べている。

このように国際教科書研究所の活動については上原や森により、またこれと密接に関係するユネスコの諸活動については勝田らによって、すでに1950年代の前半にわが国でも紹介がなされていたのだが、なぜか関係者に反響をよぶことなく終り（そのこと自体、研究に値しよう）、日本の心ある歴史・教育関係者が同研究所の活

動の意味を再発見するのは、1982年夏、日本の歴史教科書の内容が外交問題にまで発展して以後のことであった。

さて、ブラウンシュヴァイクの研究所は、教科書とりわけ歴史教科書改善のため、数多くの国際協議を重ね、少なからぬ共同勧告をとりまとめてきたが、その中でとくに重要なのは1976年にポーランドと結んだ共同勧告、および1985年にイスラエルと結んだ共同勧告の二つであると思われる。

ポーランドとの共同勧告については、すでにある程度知られているので、⁶⁾ここではイスラエルとの共同勧告の内容を、「ホロコースト」にたいするドイツ人の責任の問題を中心に、それがとりまとめられた前後の状況とあわせて紹介することにしたい。

II 西ドイツ・イスラエル両国の教科書にたいする勧告

「過去に目を閉ざす者は、現在にたいしても盲目である」として、かつてドイツ人の犯した罪を戦後に償う責任を、青年を含む国民のすべてにあらためて訴えた1985年5月のヴァイツゼッカー西ドイツ大統領の演説は、わが国でも心ある人びとの注目を集めたが、この演説の背後には、暗い過去から目をそらさず、これを償う方向に戦後ドイツの再生を求めようとした少なからぬ国民の40年にわたる努力の積み重ねがある。(もとより、国内にはそれへの逆流もあるのだが。)

そしてこの演説のあと、85年10月、ヴァイツゼッカー大統領は西ドイツの国家元首としてはじめてイスラエルを訪問するのであり、これへの答礼の形で、87年4月、ヘルツォーク大統領は、イスラエルの国家元首としてはじめて、西ドイツを訪問したのである。ヘルツォーク大統領は西ドイツで、「死者だけに許す権利があり、生きている者には忘れることが許されない」と語っている。

ヴァイツゼッカー演説に先だつ85年2月、西ドイツ・イスラエル両国関係者は、数年にわた

る協議を経て、両国の歴史・地理教科書改善のための共同勧告をとりまとめた。ヴァイツゼッカー演説、さらには両国大統領の相互訪問の背後に、それぞれの意味で重い過去を背負う両国民の、とりわけ若い世代の歴史認識を共通にするための地道な努力が、このような形で進められていることを見落してはならない。

国際教科書研究所の活動に即してみれば、この勧告には長い前史がある。研究所は、ロビンゾーン (Robinson), シャッツカー (Schatzker) の二人のイスラエル人の歴史教育の専門家(いずれも当時在独)に委嘱した研究の成果を、すでに1963年に『ドイツの歴史教科書にみるユダヤ人の歴史』(Jüdische Geschichte in deutschen Geschichtslehrbüchern)として公刊している。

さらに1979年には、同じシャッツカーに委嘱した研究の成果が『イスラエルの歴史教科書にみるドイツ像』(Das Deutschlandbild in israelischen Schulgeschichtsbüchern)として研究所から刊行されている。(ロビンゾーンはすでに亡く、この本はロビンゾーンの想い出に捧げられている。)

この二つの研究報告書が、85年の共同勧告の貴重な礎石を形づくっているのである。以下、その内容をかいつまんで紹介しておこう。

63年の報告書は、「ユダヤ人の歴史は、単なる思想ないし宗教の歴史なのではない。自国にあっても、離散してのちも、共同体として生き、働き、そして苦悩した一つの民族の歩みなのである」⁶⁾との前提から、ユダヤ人の歴史を、

- (1) 歴史の初まりから第二神殿⁷⁾の建設まで
- (2) 第二神殿の時代
- (3) 中世
- (4) 近代(第一次大戦の終りまで)
- (5) 第三帝国
- (6) イスラエル国家の前史、建設、そして今日の問題

の6つの時期に区分し、それぞれの時代がドイツの歴史教科書にどのように扱われているか(あるいは、扱われていないか)を分析している。とくに第三帝国におけるユダヤ人の運命に

については、「もっとも重要な問題は、生徒たち自身が、この事実、そして罪と責任の問題に正面から向かいあっているか否かである」⁽⁸⁾との見地から、ドイツの教科書を次の三つのタイプに分類している。

- (1) 事実を簡単かつ無味乾燥に叙述するだけで、著者自身の態度を明らかにすることを回避するもの。
- (2) 叙述は正確だが、責任は党機関や全体主義のテロ体制にあるとし、一方“民衆”は、そもそも情報を与えられず、無力であったため、罪も責任もないとするもの。
- (3) すべてのドイツ人（もちろん両親の世代）の責任をはっきりと認めるもの。

もとより著者たちは、第三の立場に立って、第一、第二のタイプを批判的にみているのだが、しかしその場合も、問題を感情ないし道徳の次元に押しとどめるのではなく、理性的・科学的に問題を究明すべきことを求めている。

「われわれは、ドイツの歴史教育が今日、自らの過去を明らかにし、ユダヤ人共同体との積極的な関係を回復するためには、無理解・無知・冷淡さに替えるに同情（Mitleid）と道徳的憤りをもってするのではなく、真剣な研究と深く真実を追究することこそが肝要だと信ずるものである。」⁽⁹⁾

さて79年の報告書は、イスラエルの教科書でドイツの歴史（とくに近・現代史）がドイツの教科書なみに詳細に述べられていることを明らかにしている。⁽¹⁰⁾そして、とくに問題となる第三帝国の叙述に関し、イスラエルの教科書は、次の三つの点でドイツの教科書と区別される、と著者は指摘する。

- (1) 叙述は詳細で、犠牲者に強い同情が寄せられ、犯罪とその実行者にたいする批判はきわめて厳しい。
- (2) ユダヤ人殺害は秘密にされていたという説は、かなりの教科書で疑問視され、つじつまが合わないといみなされている。
- (3) 罪と責任の問題にたいする答えははっきりしており、責任を負うものの範囲はかなり広い。

たとえばある教科書は、財界の責任を次のように指摘している。

「ワイマール共和制は、大工業の経済的支配権には手をふれなかった。大工業は、その支配的地位が脅かされない限り共和制を許容していたが、しかし経済危機が勃発し極左勢力が台頭するや、工業界は国粹主義・民族主義運動に接近し、極左勢力に対し共同戦線を構築しようとした。フーゲンベルク、ティッセン、そしてヒトラーの会合、その結果生れた重工業界の財政的援助、そしてヒトラーとフーゲンベルクとの政治的關係が、ヒトラーを政権の座につけた決定的な要因に算えられる。」⁽¹¹⁾

また著者は、事実に即した理性的な教科書がある一方で、「ナチの畜生」、「ナチの野獣ども」などの表現が端的に示すように、感情的な叙述に走る教科書も存在することを指摘し、これを学問的にも教育的にも不毛であるとして戒めている。しかも著者は、イスラエルの教科書が第三帝国を詳細に叙述しながら、ドイツ人の抵抗には一般に言及していないことも見落してはいない。

この79年の報告書がおそらくは直接の契機となって、西ドイツ・イスラエル両国関係者の協議が始まり、やがて85年2月の歴史・地理教科書に関する共同勧告⁽¹²⁾となって実を結ぶのである。

勧告はその前文で、ユダヤ人とドイツ人は幾世紀にもわたり生活を共にしてきたが、両者の共存はとりわけ近代において学問や芸術の世界でも、経済や政治・社会運動の分野でも、豊かな実りを結んだことをまず指摘しつつ、「この実り豊かな関係とは裏腹に、きびしい対立も一方では存在しており、この対立はやがて言語に絶する破壊的な事件へとつながっていった」として、ナチズムの時代のユダヤ人迫害・皆殺しに言及する。その上で、両民族の歴史を学ぶことの意味を次のように言っている。

「幾百年にわたるドイツ人とユダヤ人の密接な関係の歴史は、その実り豊かな結果も、破壊的な結果も、イスラエルとドイツの青少年の心に刻まれなければならない。……」

この歴史にとりくむことは、両国の生徒たちが、自分自身を理解し、お互いを理解し、双方の行動を、人間尊重と法治国家および人間と市民の権利の諸原則の上に築いていくことに、貢献するであろう。」

勧告は、両国の歴史・地理教科書の現状についての「所見」と、改善のための「勧告」とから成り立っているが、ここではユダヤ人迫害・大量殺害の問題に焦点を合わせて、西ドイツの歴史教科書にたいする「所見」と「勧告」の特徴を見ることにしよう。

まず「所見」は、次のように言っている。

「教科書でもっとも詳細に叙述されているのは、近・現代の世界におけるユダヤ人の歴史である。……疑問の余地なく正面にすえられているのは、反ユダヤ主義のイデオロギーであり、——さらにそれ以上に——ナチズムの支配の下でのユダヤ人の迫害や殺害である。教科書はこの時代のユダヤ人の運命について、口をつぐんでもいないし、表現を和らげてもない。

報告は全体として——以前の教科書に比べ——著しく密度の濃いものになっている。このことは、単に叙述の分量が増え、かつ全般的に文献や写真の原史料がきわめて広範にとり上げられている点に表れているだけではなく、——とくに最近の教科書では——ユダヤ人迫害がヒトラー個人の歴史の一部としてとり扱われるというよりは、むしろ社会的コンテクストの中で論じられている点にも表れている。

ユダヤ人迫害にたいする責任・共同責任という重大な問いは、必ずしもつねに十分明確に答えられてはいないにせよ、以前の教科書に比べ、いっそう強く押し出されている。」

「所見」はこのように教科書の積極面を評価しつつ、他方で、迫害が主として国家の措置として叙述されていることを問題にし、犠牲者の側からもこの問題をとらえることの必要性を指摘している。さもないと生徒は、「^{ひとごと}他人事」という印象をもちやすいからである。

さて、「勧告」で注目されるのは、次の箇所である。

「1933年から系統的な大量殺害が始まるまで

のドイツにおける反ユダヤ政策は、単に副次的なとり扱いで片づけてはならない。

ユダヤ人の権利剝奪、社会的差別、社会からの隔離、そして追放は、適切な実例に即して教示されなくてはならない。そうすれば生徒は、ナチス・ドイツで、ホロコーストの始まるはるか以前に、万人の目の前で、しかも抗議の声も（ユダヤ人を）援助しようとする試みもごくわずかなままで、何が起こっていたのかを学ぶであろう。

ナチストによって計画され、恐るべき範囲でヨーロッパのユダヤ人にたいして実行された民族皆殺しは、詳細かつ正確に叙述されなくてはならない。……

ユダヤ人の迫害や大量殺害にたいする責任・共同責任への問いは、当然設定すべきであり、この問いに答える試みを回避してはならない。」

一見して明らかなように、問われているのは直接の加害行為や殺害行為だけなのではない。ホロコーストにいたるまでのあらゆる段階でのドイツ国民の不作為、冷淡さ、怠慢、そして怯懦が問われているのである。そして、こうした問いにまともに向かいあい、きちんと答えられるようになることが、歴史を学ぶということなのだ、と理解されているのである。

そしてその基礎は、国際教科書研究所の活動に即していえば、すでに63年の研究報告書によってすえられていた、とみることができよう。

Ⅲ 西ドイツの若い世代とユダヤ人との対話

1950年代から今日にいたるまで、イスラエルやポーランドなどで贖罪のために無償の奉仕活動を行なう青年グループは、「贖罪を示す行動・平和への奉仕」（プロテスタント系の組織）など跡を断たない。アウシュヴィッツ強制収容所跡に限ってみても、こうした目的でここを訪れた西ドイツの青年グループは、1983年だけで、20を超える。彼らはここで奉仕活動を行なうだけでなく、アウシュヴィッツで起こった事実とその意味とを深く学ぶことを自らに課しているのである。さらに連邦政治教育センター

03の手で社会教育関係者や教員のグループをイスラエルに派遣し、帰国後、政治教育（とりわけ人種主義の克服）の中心にすえる、といった努力も多年にわたり続けられている。

また西ドイツ国内でも、かつての強制収容所跡が記念館になっている例がバイエルン州のダッハウなどに見うけられるが、こうした記念館を授業の一環として訪問することは、州文部省によっても奨励されている。ダッハウの記念館だけで、1983年に訪れた学級や青少年グループの数は約6000、人数的には10数万人を数える。だから近年では、生徒たちのグループ参観に対応するため、州文部省は専門の教職員を特別に配置している。（ちなみに、バイエルンは保守色の濃い州である。）

また、イスラエルのユダヤ人とクラスで文通し、それをめぐって授業で討論するような例も生まれている。⁰⁴

1981年の初め、イスラエルの日刊紙『エルサレム・ポスト』に、デサウルという読者からの手紙が掲載された。それは、ドイツとイスラエルとの友好関係やドイツ製品がイスラエルで愛用されていることに疑問を投げかけ、「私はドイツ人とドイツに関わる一切のものを憎み続ける」というものであった。

西ドイツのホッホダール^{ゲムナジウム}中等学校のある生徒が、この手紙をクラスに持ち込んだ。授業で真剣な討議を重ねた末、このクラスは、『エルサレム・ポスト』へ次のような手紙を送った。

「エルサレム・ポストの編集者へ、

私たちはあるドイツの中等学校の生徒で、年齢は14-16才、デュッセルドルフの近くに住んでいます。

私たちは最近、2、3ヶ月前の『エルサレム・ポスト』にのった一つの手紙を読みました。その中でM. B. デサウル氏は書いています、『そうです、私はドイツ人とドイツ人に關わる一切のものを憎み続けています。彼らは600万人のユダヤ人を虐殺しただけではなく、さらにさまざまな方法で、いっそう多くの生命をふみにじったのです!』と。

私たちは、ナチスの犯罪がユダヤ人に想像を

絶する苦悩をもたらしたことは知っています。しかし私たちは、デサウル氏の手紙に表れているような憎しみの感情が、すべてのドイツ人に、つまり私たちのような若い世代にまで向けられていることを、意外に思っています。

ナチスの時代、私たちはまだ生まれていませんでした。ですから、私たちの世代にナチスの犯罪の責任を負わせることはできません。私たちは当惑しており、この憎しみを克服するために何をすればよいのか、是非知りたいと思っています。」

この投書にたいし、生徒たちにイスラエルから34通の手紙が寄せられた。イスラエルからの手紙は、(1)若い世代に責任はないとするもの、(2)「憎しみ」を理解するよう求めるもの、に大別できる。（他に、ネオ・ナチズムへの警戒を呼びかけるものもある。）

まず前者の例を引こう。

「デサウル氏の見解に私は反対です。私もナチスの犠牲者でした。1939年、私はウィーンにあった私の家から追いたてられ、両親とは別れ別れになりました。私の両親は強制収容所に送られたのです。

私はこうした行為を犯したか、あるいは黙ってそれを看過した人びとにのみ責任があると思います。それ以外の人は誰であれ——あなた方やあなた方の世代を含めて——責任はありません。そして私は、あなた方を私の同胞とまったく同様に愛し、尊重するものです。」（手紙A）

「理性ある人間ならば誰しも、あなた方やあなた方の年齢の人たちが、ナチ時代の出来事に何らかの責任があるなどとは考えません。」（手紙B）

次に「憎しみ」を理解するように求める手紙の例を引こう。

「迫害された人びとの感情を、可能な限り、理解するよう努めて下さい。私の近親者の一人は、次のような辛い体験をしました。彼女は、夫と二人の子どもとともに、悪名高きアウシュヴィッツの強制収容所に連行されました。

いわゆる「選別」の際に——ガス室送りは一方の列に、他の者は別の列に並ぶよう命令され

ます——夫と二人の子どもはガス室に送られ、彼女自身は別の列へふりわけられました。

自分の家族といっしょに死にたいと彼女が頼むと、残酷な答えが返ってきました：お前はまだ若い、お前は働ける！と。

あなた方には、責任を感じる必要はないにせよ、理解しようと努める必要はあります。この心優しい婦人は、悲しいかな、憎むことを知ったのです。」(手紙C)

「偶然、私はナチ時代に殺害を免れ、この地へ逃れることができたのですが、しかし私の親戚、知人の多くは、あの時代に、これ以上ない悲惨な死に方をしました。また、どうにか強制収容所から救出された親戚・知人も多いのですが(この場合、重要なことなのですが)、彼らの心には恐ろしい傷跡が残り、その後遺症は、次の世代にも、さらにそのまた次の世代にも(意識すると否とに関わらず)ひきつがれています。ですから、今日にいたるまで、非常に多くのユダヤ人に苦悩は生き続けているのです。

ですから私は、あなた方に、肉体的にも精神的にも言語に絶する苦悩をなめた人びとには、つねに論理的に過去と現在とを分けて考えることを期待できないことを、理解してほしいと願っています。」(手紙D)

なお手紙Dは、「自主的に思考し探究するドイツ人の世代が存在し、偏見にとらわれず善意に生きようとし、私たちすべてに、人間を評価する際に過度の一般化を避けさせようとしていることは、一筋の希望の光です」とも述べている。

また、最近アメリカから帰化したあるイスラエル人は、こう書いている。

「私はあなた方の手紙から、あなた方がナチの犯罪によりユダヤ人が言語に絶する苦悩を体験したことは知っていると推察いたします。あなた方が知らないのは、この苦悩がずっと続き、次の世代にさえ持ちこされていることです。

私もイスラエルに来るまでは、憎しみを理解していませんでした。肉体的にも精神的にも深く傷ついた人びとを身の周りに見たとき、私はなぜ人びとが——失礼ですが——ドイツを今日

にいたるまで憎んでいるのかを理解しました。

もちろん、あなた方はあの恐るべき時代にはまだ生まれてもいませんでした。——もちろん、私にはあなた方を憎むことはできません。しかし、いまもなお苦しみ続け、その子どもたちも苦しんでいる人びとは言います、……この若いドイツ人たちの両親は、われわれを苦悩させた。そしてわれわれはいまなお、この苦しみを背負い続けて生きている——それなのに、ドイツ人の子どもたちは、彼らの両親には責任がなかったかのように、大手を振って歩き回っていてよいのか、と。私にはこの憎しみを克服するのに、何が必要なのかわかりません。……

この恐るべきテーマに、すっきりした答えがあるとは、私には思えません。ホロコーストと憎しみとは、残念ながら結びついています。しかし、多くの若いドイツ人がイスラエルにやってきて、ここで働いていることも事実です。彼らは私たちに、若い世代の善きドイツ人の実例を次々と示してくれています。……あなた方のすべてに神のご加護がありますように、過去の世代の罪を背負って生きるあなた方に、神のお助けがありますように。……」(手紙E)

このあとさらに、生徒たちとイスラエルの人たちとの間で活発な手紙の交換が行われるのだが、やがてデサウル氏自身からも手紙が寄せられる。彼はナチスの時代、多くの肉親を失っていた。彼は記している。

「もちろん私は健全な人間的理性はもっているし、過去においても現在においても、すべてのドイツ人に責任があるわけではないことは、わかっています。」

「君たちは健やかに、強く育ってほしい。煽動者を信用しないように。自分自身の判断力、自分自身の批判力を使うように。自分自身で決断すべきことを、決して他の人に任せてはなりません。

そうすれば、未来には、君たちの世代には、希望があるかも知れません」と。

この西ドイツの若い世代とユダヤ人との対話について、西ドイツのブライト博士(政治教育専攻)は次のように言っている。

「教科書に整理されている事実や数字の背後に、どれほど多くの人間的苦悩が潜んでいるかを知ること」、「自分にとっては過ぎ去ってしまったかに見える『歴史』としての過去と、自分自身の現在とのつながりを、はっきりと認識すること」は、生徒にとって困難な課題である。しかし、「ドイツ史の連続性のイメージは、少なくとも外国の、とりわけ犠牲者の意識には生き続けている」のであり、戦後世代も「自分自身の民族的アイデンティティの歴史性について深く考えること」が重要である。

「ドイツ人は、好むと好まざるとにかかわらず、ドイツの民族的アイデンティティが、1945年ないし1949年に出発したのではなく、ドイツの歴史を背負い、しかも他ならぬ第三帝国の時代を背負っているのだということを、学ばねばならない。」

もちろん、西ドイツの教育全体がこのような認識に導かれているというのではない。しかし、「民族的アイデンティティの歴史性」や「戦争責任と戦後責任」といった重い問いにまともに向かいあっている若い世代が、決して少なくないこともまた事実なのである。

Ⅳ 西ドイツと日本を比較する視点をめぐって——おわりに——

戦争責任・戦後責任の受けとめ方にみる西ドイツと日本との開きはどこから来るのか。

その原因を主として国際環境に求める見方がある。

冷戦の顕在化とともに、アメリカの対外政策が、戦争とファシズムの過去を問うことから、何はともあれ西側最前線の強化へと重点を移していったことは、西ドイツのばあいも日本のばあいも同じである。しかし西ドイツは、かつて侵略した国々と直接国境を接しており、とりわけドイツの宿敵フランスは戦後の西ドイツにも厳しい目を向け続けていた。これに対し日本は、かつての被侵略国とは海によって隔てられており、戦後の国際政治の中では、アメリカの意向にのみ配慮すれば一応事足りるような時代

がしばらく続いたのである。

しかも西ドイツのばあい、ヨーロッパ共同体を実現し、その一員として生きることこそが国策であったのに対し、日本のばあい、アジアの一員として生きるという意識は稀薄で、むしろ明治期に引き続く第二の「脱亜入欧」こそが戦後初期からの国策であったといえるのである。

09

こうした国際環境の違いが、西ドイツと日本の開きを生む有力な原因であることは確かだが、しかしそれをほとんど唯一の原因とみるのは行き過ぎであろう。

「国際環境決定論」では、たとえば、第二次大戦中ナチス・ドイツの共犯者であったオーストリアが、戦後その事実を口をぬぐい続け、そのツケが近年ワルトハイム疑惑⁰⁹となってまわってきている事情を、おそらく説明できまい。問題の解明には、国際環境など客観的条件のみならず主体的条件の違いをも視野に収める必要がある。

主体的条件に関していえば、西ドイツと日本の開きの原因を、近・現代における両国の政治的伝統の違いに求める論者も少なくない。

ドイツのばあい、いずれも未完に終わったとはいえ、1848年の3月革命、1918年の11月革命を体験し、またその間ヨーロッパ最大の社会主義政党を育てているし、さらに戦間期には当時世界でもっとも民主的といわれたワイマール憲法を成立させ、社会民主党も幾度か政権に参加したのであった。そしてナチスの時代にも、さまざまな形で抵抗運動が進められた事情は、たとえばヴァイゼンボルンの『声なき蜂起』(1954)が記録するところである。こうした伝統は、日本のばあい著しく乏しい。しかもドイツのばあい、20世紀前半、二度までも総力戦そして敗戦を経験していることも、日本との違いとして着意されてよい。

こうした政治的伝統の違いが、両国民の政治的・社会的責任の意識の成熟度の違い、そしてまた戦争責任の受けとめ方の違いとなって表れていることも否定できまい。

私はさらに、これら二つの原因に加えて、政

治的伝統の問題とも関連するが、より長い歴史の過程で蓄積された思想的・文化的伝統の違いにも着眼すべきだと思う。

日本人に国家を相対化する思想の伝統が乏しいことは、たとえば安川寿之輔⁹⁰の指摘するところであるが、ユダヤ・キリスト教世界のばあい、神の存在を肯定することには国家を相対化することに通じる要素があり、逆にいえば、国家を相対化する支えとして神の観念が成熟したとも見られるのである。

だから、国家を相対化する存在としての神のいる国⁹¹と、神のいない国、あるいは神が地上に降りてきて天皇となり、国家と一体化した国との違いは、さらに厳密に見究める必要があるだろう。この事に関わっていえば、たとえば戦後の西ドイツをリードしたアデナウアーと戦後の日本をリードした吉田茂とでは、同じ保守政治家とはいっても、大獄秀夫⁹²の指摘するように、保守すべき価値には大きな開きが認められるのである。

まず、二人の言葉を引こう。

「我々人間は神の前に平等であり、すべての人間は自らの人格の発達と自由への権利をもつ」（アデナウアー『回想録』）。

「父母を同じくするもの家をなし、祖先を同じくするもの集って民族をなし、国をなす。皇室の始祖はすなわち民族の先祖であり、皇室はわが民族の宗家というべきである」（吉田茂『回想十年』）。

つまり、アデナウアーにとって保守すべき価値は、キリスト教に基礎をおく個人主義・リベラリズムであり、吉田にとってのそれは、天皇を中心とする家族国家に他ならない。この二つの保守の開きの中に、西ドイツと日本の思想的・文化的伝統の違いが凝縮されているように思われる。

要するに、戦争責任・戦後責任の受けとめ方にみる西ドイツと日本の違いを生む要因は複合しているのであって、単一の要因のみで事態を説明するのは、無理であろう。

しかも西ドイツにおいても、戦争責任をあいまいにしようとする政治的・思想的潮流が根強

いことは、たとえば『歴史家論争』の示すごとくである。

ヴァイツゼッカー演説を直接の契機に展開されたこの論争で、ノルテ等は、スターリンの少数民族抑圧や大量粛清、さらにはアメリカのベトナムにおける“ジェノサイド”などを引きあいに出し、ナチス・ドイツの犯した罪を相対化しつつ過去をして過ぎ去らしめようとし、他方ハーバーマス等はこれを厳しく批判して、重い過去から目を外してはならないことを強調したのであった。

1988年の西ドイツ歴史学会で来賓として挨拶したヴァイツゼッカー大統領も、あらためて、ドイツの過去の相対化を戒めつつ、「歴史は歴史家のためののみあるのではない」とこの挨拶を結んだのであった。⁹³

西ドイツ（あるいは西欧諸国）の中に一つの依り拠を求め、これを基準に日本の現実を批判するとき、西ドイツ（あるいは西欧）を理想化するものだと批判がしばしば生ずる。

私は西ドイツが日本と多くの共通点をもち、幾多の批判さるべき現実をかかえていることをいささかも否定するつもりはない。西ドイツの「たたかう民主主義」についての評価は、わが国の進歩的知識人の間でも当然分かれるであろう。

私が西ドイツとの比較によって日本を批判するのは、西ドイツを理想化してのことではない。西ドイツの中に、日本の現実を批判し、かつ西ドイツの現実をも批判する確かな支点が、ヨーロッパの思想的・文化的伝統に根ざし、かつ一定の民衆的基盤をもって存在していると考えてのことである。

注

- (1) Jaspers, Die Schuldfrage. 1946.
- (2) 教員養成系の大学。ブラウンシュヴァイク教育大学ともいう。
- (3) 勝田守一「ヨーロッパで考えた日本の教育」、『教育調査』1951年1月号、『勝田守一著作集 第1巻』1972、所収。
- (4) 森 昭『ドイツ教育の示唆するもの』1954、323

ページ。

- (5) とりあえず、拙著『ドイツ人の歴史意識』1986、を参照されたい。
- (6) Robinsohn/Schatzker, Jüdische Geschichte in deutschen Geschichtslehrbüchern. 1963. S. 12.
- なお本書で著者が、ユダヤ民族がヨーロッパ社会に引き継いだ思想的遺産として、(狭義の宗教は言わずもがな)個人の尊厳と責任、社会の個人にたいする責任、国家(国王)権力の制限、抵抗権などを指摘していることも注目されてよい。(Ebenda. S. 15)
- 思うに、絶対者・超越者としての神の存在(ないし、それへの信仰)は、国家(ないし国王)の存在を相対化し、個人の尊厳と責任の自覚に道を拓くのであり、少なくとも、「神のものは神に、カエサルのはカエサルに」というキリストの言葉が示すように、国家の力が及ばず、神と一人ひとりの人間とが直接に向かいあう精神的自由の世界を成立させるのである。そして神ないし自分の良心に究極の基準をおいたとき、国家に対する抵抗権の思想も成り立ってくるのである。
- (7) ソロモンがエルサレムに建立した第一神殿は、BC586年にバビロニア人に破壊され、ユダヤ人の「バビロン捕囚」の時代が始まる。さらにペルシア人の支配を経てのち、BC5世紀、ユダヤ人はようやくパレスチナへ帰還し第二神殿を建設する。AD70年、第二神殿はローマ人によって破壊され、ユダヤ人の「ディアスポラ」(離散)の時代が始まる。
- (8) Robinsohn u. a., Ebenda. S. 9.
- (9) Ebenda. S. 9.
- (10) たとえば、Ziw-Ettinger-Landau, Geschichte. Bd. 4 Tl. 2, 1971 は、ワイマール共和制初期の歴史を、「ワイマール共和国の樹立と国内の対立。革命後の臨時政府とその政策」「スパルタクスの蜂起とその敗北」、「ワイマールでの憲法制定議会」、「ワイマール連合」、「ワイマール憲法」、「経済危機、新体制に反対する民族主義者の宣伝」、「短刀伝説」、「軍事団体」、「右翼一揆の失敗」、「国防軍と総司令官ゼクト將軍」、「その他の共和国の反対者」の各項目に即して叙述しているが、ここでは最初の3項目を全文引用してみよう。

ワイマール共和国の樹立と国内の対立。

革命後の臨時政府とその政策

皇帝ヴィルヘルム二世が退位を余儀なくされ、ドイツを亡命したあと、帝国最後の宰相は、6人の社会主義者によって構成された“人民代表委員会”に政権を委ねた。委員会を代表したのは社会民主党員のフリードリヒ・エーベルトで、職業は馬具師であったが、彼はその後、ドイツ憲法制定議会によりドイツ共和国初代大統領に選出される。彼は労働運動の執行部の一員から、この高い地位に昇進したのだった。穏健で、思慮分別とすぐれた現実感覚とに恵まれていた彼は、イデオロギー論争にも、社会革命の実験にも左袒しなかった。この委員会是一種の臨時政府でもあったのだが、その最初の措置は、休戦条約に調印するドイツ代表団の任命、帰還するドイツ軍の新司令官の任命、そしてドイツの将来の憲法を決定する憲法制定議会選挙の告示であった。

この国家権力の変更は、ほとんど流血を招くことなく、大きな社会不安を来たすこもなく、また従来の権力者の側からさしたる抵抗を受けることなく遂行された。たしかに、あちこちで士官が襲われ軽傷を負うといったことはありはしたが、全体としては社会生活は従来どおり営まれていた。ドイツの世論は革命を受け入れ、臨時政府の決定に従った。この時期の事態を主導し、左右する勢力であった社会民主党の指導者たちには、社会の統治形態を根本的に変革する意図は毛頭なかった。彼らは当初、君主制存続の可能性を全く排除したわけではなかったが、ともあれ民主的で自由な共和国の樹立に努め、ボルシェヴィズム・モデルの革命を断固斥けたのであった。これとは態度を異にしたのがドイツ労働運動の左翼、すなわち、カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクの指導するスパルタクス団であった。スパルタクス団は、来たるべきドイツ共産党の中核となった。

スパルタクスの蜂起とその敗北

スパルタクス団は1919年初め、首都を制圧しようとした。臨時政府の国防相で社会主義者のノスケは、皇帝の軍隊とその士官たち一すなわち、民主

主義および帝国崩壊後のドイツに成立した体制の仇敵一の助けをかりて、蜂起鎮圧に成功した。ベルリンでは市街戦が展開され、約1週間続いた。スパルタクス団の意気は盛んであったが、正規軍に対抗することはできず、蜂起は敗北した。約1000人が殺害され、多数が逮捕されたが、その中にはカール・リープクネヒトやユダヤ人のローザ・ルクセンブルクもいた。二人は1919年1月、逮捕連行の途中、監視兵によって惨殺された。ドイツの他の地域でも、その中にはバイエルンも入っていたが、社会主義革命の実現がめざされたが、いずれも失敗に帰した。

共和国の臨時政府が、カイザーに忠実な士官たちの手を借りて蜂起を鎮圧したという事実は、独立社会民主党の反発を招き、同党の代表は政府から脱退した。

ドイツ労働運動の分裂は深刻化し、その後の数年に重大な影響を与えることになった。

共和制政府と軍指導部との協力は、たしかに政権の安定には役立ったが、しかし政府の自主性を損い、共和制に敵意を持つ勢力への依存度を高めることになった。

ワイマールでの憲法制定議会、

“ワイマール連合”

これらの出来事は、ドイツにおける政治的・社会的緊張へとつながっていった。このような雰囲気の中で、1919年1月、憲法制定議会の選挙が完全に民主的な選挙権に基いて行われた。人びとは大挙して選挙に参加し（約85%）、穏健な政党を勝利させた。社会主義者も、事志とことなり、多数を制するには到らなかった。

ワイマールの町で1919年2月に開催された憲法制定議会ではそこで一般に“ワイマール”共和国と呼ばれるのだが、社会主義者は最強の政党で、その指導者のエーベルトが大統領に選出されはしたものの、政府は社会主義者と中道政党の代表によって構成されることとなった。これがワイマール連合で、共和制期ドイツの大半の政権を担当する。

半年間の審議を経て憲法制定議会は、この年の夏に新憲法を承認するが、それは国内法のエクス

パートでユダヤ人のフーゴー・プロイスの起草になるものであった。

In Schatzker, Das Deutschlandbild in israelischen Schulgeschichtsbüchern, 1979. S.S. 57-59.

このようにイスラエルの教科書におけるドイツ史の叙述は実に詳細で、ローザ・ルクセンブルクやフーゴー・プロイスがユダヤ人であるとの指摘を除けば、ドイツの教科書ととくに違いはない。このことは、ユダヤ人が歴史的にドイツ人と深く関わってきた事実由来しよう。

「ユダヤ人は最初の中世社会では、東のドイツと西のスペインで定着繁栄し、独自のユダヤ文化をつくりだした。このふたつの流れを、東はアッシュケナジム（東ユダヤ人）、西はセファルディム（西ユダヤ人）とよぶ。中世においては西ユダヤの系統が圧倒的に盛大であったが、次第に追放され、あるいは同化埋没して影をひそめ、近世以後は東ユダヤ人が東欧諸国にひろがり、さらにアメリカ大陸へ自由の天地を求めて膨張を続け、今日の世界では、アッシュケナジムの系統がユダヤ人の大部分を占めている。」（山下肇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』1980. 21ページ。）

古代ローマの時代から中世にかけて主にドイツに定着した東方ユダヤ人は、十字軍などを機に迫害され、東欧各地に離散してゆくが、彼らは宗教のみならず共通の言語（イディッシュ語という。中世ドイツ語が基礎）をも守り、共同体としての連帯を失なわなかった。しかもドイツのばあい、東欧に比べれば相対的に反ユダヤ主義が弱く（また同じドイツ系でもベルリンはウィーンよりも反ユダヤ主義が弱い。ヒトラーの反ユダヤ主義はウィーン仕込みである）、19世紀から20世紀にかけてユダヤ人の才能がドイツ人社会においてこそ存分に発揮された事実は、マルクス・フロイト・アインシュタインの名を挙げれば十分であろう。

このような歴史的事情から、東方ユダヤ人の間では、ドイツを「故国」（あるいは「心の故郷」）ととらえる傾向がかなり強かったのだが、そこヘナチスの時代、「ホロコースト」が襲ってきたのである。だから、ユダヤ人のドイツにたいする感情に

は、まさにアンビヴァレントなものがあろう。

- (11) Shapira, Geschichte der Völker in der Neuzeit. Bd. 4. 1966. S. 92 f. In Schatzker, a. a. O., S. 33.
 - (12) Deutsch-israelische Schulbuchempfehlungen, Schriftenreihe des Georg-Eckert-Instituts Bd.44. 1985.
 - (13) Bundeszentrale für politische Bildung. 1952年, 「ドイツ国民の中に民主的かつヨーロッパ的思想を根づかせ、かつ広げる」ことを課題に設置され、今日では「政治教育を通じて、ドイツ国民の中に政治状況についての理解を進め、民主主義の意識を根づかせ、政治参加への意志を強める」ことを目的とする社会教育組織。その活動は、映画・テレビ番組の製作・普及、機関紙（週刊）「Das Parlament」その他内外の政治・経済・社会の諸問題や現代史に関する数多くの出版物の編集・普及、政治教育関係の講座・セミナーの開設、研究会議の開催、学校教育用の資料の編集・普及など多岐にわたるが、こうした活動の一環にイスラエルへの「研修旅行」も位置づけられるのである。このセンターで編集した資料が学校で副教材として利用されるばあいもあり、ドイツの歴史教科書がまだ第三帝国の実態について口ごもっていた時代には、このセンターの出版物が、ナチスの時代に何が起こったのかを広く国民に知らせる上で重要な役割を果たしたといわれる。
- なお、センターの理事会には、連邦議会に議席をもつ全政党が議席数に応じて代表を送っており、センターの活動が政権政党によって左右される余地はあまりないと見られる。
- (14) 以下の記述は専ら、Briefe aus Israel an deutsche Schüler, In Internationale Schulbuchforschung, 1984 Heft 2. によっている。
 - (15) 西ドイツと日本の戦後の国際環境については、油井大三郎『未完の占領改革』1989の終章に簡潔な比較がある。
 - (16) 事件およびその背景については、藤村信『夜と霧の人間劇』1988、に優れた分析がある。
 - (17) 『15年戦争と教育』1986、および、1988年度日本教育学会・課題研究「平和教育」での提案。
 - (18) もとより、神のいる国においても、教会がしばし

ば国家と癒着し、国家を補強してきたことはまぎれもない事実であり、その限りでは「宗教は民衆の阿片である」とのテーゼもまた真実なのである。われわれは、神の「光と影」の両面に目を配る必要があるだろう。

- (19) 『アデナウアーと吉田茂』1986.
- (20) 「Das Parlament」(前出、政治教育センターの機関紙) 1988年11月11・18日合併号。

＊ 1987年度日本教育学会大会・課題研究「平和教育」での私の提案にたいし、何人かの方からご質問が寄せられた。これにお答えする意味で、提案要旨に大幅に加筆したのが、この論稿である。